

学び合い、高め合いの教育の追求

全国協同学習研究会会報 2005年度 1号

発行日：2005年6月30日

事務局

新年度のご挨拶

2005年度会報第1号をお送りします。昨年度は協同学習の発展の契機となる年度でした。日本協同教育学会が発足し、主に西日本で幅広い展開をしてきている「全国個を生かし集団を育てる学習研究協議会」（個集研）との連携をはじめとする、国内のさまざまな協同学習実践者、研究者が集う場ができました。さらに、国際協同教育学会との連携も深まり、アメリカの協同学習の情報もこれまで以上に紹介されるようになって来ました。

2005年度も、さらに、積極的な展開が見られそうです。

東京、練馬第三小学校での全国大会をはじめとして、協同学習への実践的関心は次第に広がってきています。名張市の百合ヶ丘小学校では、今年度研究発表会を秋に行う予定でいます。中心は、学び合い、高め合いを目指す授業実践です。また、米子市の箕蚊屋中学校でも、秋の研究会で協同学習を軸とした研究を発表します。犬山南小学校では、キャリア教育というテーマの下で、子どもたちのトータルな成長を図るべく、協同原理を幅広く捉えて実践を進めています。ここも今年度研究発表を行います。野田市、土岐市、可児市、春日井市、犬山市、小松市、名張市、その他・・・、真剣な教育改善に取り組む過程で、協同の大切さは確実に根付いてきているようです。研究会などの情報は、おいおいお伝えしたいと思います。

本号は、投稿いただいた原稿を中心に構成しました。教育実践に関わる議論をさまざまな側面から論議する場としても、ぜひこの会報をお使いいただきたいと思います。「協同」ということばを使わない議論でも、実践に役立つ議論は必ず協同学習と整合してくるはずで、積極的なご投稿をお願いいたします。

なお、昨年末より e-mail アドレスを事務局が把握できた方には、会報を e-mail で送らせていただいています。不都合はないでしょうか。同様の形でお送りできる方は事務局にご連絡ください。

新しい時代に要請される学力形成をめざすならば、協同学習という選択肢を避けるわけには行かないでしょう。自信を持って、共に実践と研究を進めましょう。

カウンセリングの安全神話

宇田 光（南山大学総合政策学部）

JR西日本の大事故。いったいなにをやっていたんだ！という怒りの声が沸き上がっている。「身近なところに、あんな危険な状態が放置されていたのか」と啞然とするばかりである。安全管理の専門家がちゃんといたはずなのに、どうしたことであろう。

情報化がすすみ、今まで隠されていた現実が、どんどん目の前にさらされてくる。そして、専門家だと思って信頼していた相手に裏切られる経験をする。実態が明らかになるにつれて、「専門家」が、突然凡人に見え始める。裸の王様である。

カウンセリングや心理療法も、なぜか根拠もなく安全だと信じられているように思われる。しかし、本当にそうなのか。たとえば、能力・資質に疑問のある人、あるいはひどく傲慢なカウンセラー人が、間違いなくいる。権威を振りかざすカウンセラーである。資格を持つと、えらくなったように錯覚するらしい。カウンセリングという活動は、プライバシーを保護する必要から、密室にこもっての話し合いになりがちである。もし問題のあるカウンセリングが行なわれていても、発覚しにくい。暴走列車が常態化しているかもしれないのだ。実際、アメリカ合衆国で90年代に、RMT（記憶回復療法）という危険な治療が、多数の被害者を出して社会問題となっている。記憶の本質に対する無知が引き起こした悲劇である。治療者本人は、正当な治療をしているつもりなので、たちが悪い。RMTは、深刻な被害をもたらした事例であった。日本でもいずれ、カウンセリングの安全性に対する本格的な糾弾が待っているのかもしれない。

情報公開の時代には、傲慢なカウンセラーは滅びる運命にある。相談や心理テストの記録を開示要求された時、どうするか。独善的な姿勢で書かれたメモや、信頼性の低い性格テスト。こんな中身では、他の専門家による批判には耐えられないだろう。

専門家がプライバシーにふれようとしたとき、「その情報は有効に利用されますか」と問い返される。よって、今後の対人サービスは、情報開示要求に耐えられる方法が基本となっていく。たとえば近年注目を集めている解決志向ブリーフカウンセリングは、解決志向・未来志向を特徴としている。過去の失敗を掘り起こして、あれこれと追求するようなまねはしない。できる限りプライバシーにさわらない方向性を取るのである。その人の良いところ、うまくやれた努力・工夫の部分にのみ焦点を当てる。だから、相談記録の開示を求められても、困らない。この発想は、とかくプライバシー保護の観念が弱いと非難される教員にも、参考になるはずである。

専門家の権威が、しっかりした実態を伴うものであれば、何ら問題はない。しかし、それが根拠をもたない神話であれば、遅かれ早かれ、必ず崩壊するものである。

マーフィ著（市川・宇田訳） 中学校・高校でのブリーフカウンセリング 二瓶社

私の視点： 今 説明責任があるとおもうが

丸山正克（全協研常任委員）

小泉首相がイラクに自衛隊を派遣したとき、説明責任論が政界を駆けめぐった。どうしても、こういうことになるのか本心を語れと言うわけである。日本の国際的な立場が、流行語的に表現すれば「超」変化したにもかかわらず、首相は同じことを金太郎飴のごとく繰り返すことで「十分説明した」と考えているようである。

最近の教育界にも説明責任を問いたい大きな変化が見え始めた。小泉首相は言葉足らずでも、一応「説明」はなされたが、いまの、教育界の現状はそれがなされていない。

日本の義務教育制度が施行されて以来、その普及のために「表彰」という発想が取り入れられた。どんなことでもよい、みんなより一生懸命努力したことを認めて、「やる気」を持続させようとしてきた。「表彰」は、子ども達が学校へ来ることの魅力と、子ども達のやる気を育てるという外的動機付け、学習への参加度を高める手法だったであろう。だから、教育制度の遅れを取り戻し、学力テストの成績で日本教育の優秀さを誇示しようというような意図はなかったのではないかと思う。子どもにとって楽しい学校であり、一生懸命勉強してくれることをねがい、どの子どもでも何か良いところ、努力が認められれば、素直(?)に表彰の対象にし「やる気」を育てるという手法を取った。

ところが、時代の要請、社会のニーズという大義名分からだろうか、表彰に「ランク付け」が始まった。それが、競争教育を生み出し、偏差値至上主義、受験競争、見切り発車指導、詰め込み指導、落ちこぼれを生み、児童・生徒のランク付け、不登校、学級社会不適應、学級集団の人間関係の崩壊など、学校教育の欠陥オンパレード状況を生みだした。

「みんなで、みんなの学校をつくる」「みんなで、みんなのやる気」を起こさせる「みんなで、みんなの学習成果をあげる」という、教育の原点に立ち返ることを目指した「ゆとり教育」がスタートした。そして、学力をテストで高得点をマークする「テスト主義」から、生涯学習の意欲育成をめざし、それを「学力-いきる力」とし、大きく発想の転換をした。それには、文部科学省が「有識者・専門家」を委員とした中央教育審議会を構成、そこで、将来を展望し、社会のニーズを分析し、さらに、教育現場の実態を調査し、「学校教育の在り方」をまとめ文部科学大臣に答申したはずである。「いきる力」の育成と「ゆとり教育」はその所産であった。

週5日制の実施と相まって「学力低下」問題を含みながらのスタートであった。教育現場では、発想の転換と新しい学習指導の創造的研究実践が始まった。ところが、OECDとIEAの国際調査の結果が発表されるやいなや、「ゆとり教育」が足下からぐらつき否定され始めたのである。それに、担当大臣までが荷担するという何ともお粗末な状況が見え始め、果ては「競争して学力を上げろ」とまで言い切っている。(中山文部科学大臣 2004.12.18 朝日新聞)

「ゆとり教育」「いきる力の育成」は、1回のテストの成績で一喜一憂するようなものを目指していたのだろうか。当時の中教審ではそんな安っぽい「学力論」が展開されていたのであろうか。「有識者・専門家」であるあなたの考え、あなたの発想が否定され、逆戻りさせられようとしているのである。なぜ、当時を説明しようとはしないだろうか。説明責任が最終決定者の文部科学省にあるというのなら、担当大臣に説明責任があるあると思うのは私一人だろうか。

1回の調査結果で、これはダメだと簡単に基本理念(?)が変更されるようでは、教育現場の研究と実践は、価値のない屑のようなものにされることと同然である。中教審の答申は、委員が現場を代表して、もてる知識と専門性を収れんして築き上げた労作であるという自負があるなら、説明責任を果たし、その意義と重要性を明らかにして欲しいものである。

最近の丸山さんの本 『日本横断徒歩旅行記―飯田線・大糸線各駅訪問
500キロ』 文芸社 2004年

総合的な学習への大学教員の期待

伊藤康児（名城大学人間学部）

大学における教養教育

大学教員として教壇に立つようになって、25年が過ぎた。長くかかわっているせいか、大学の行う教育について考える機会が増えたように感じる。

大学教育を大きく専門教育と教養教育に分けて考えてみよう。専門教育は学部・学科の設置目的にそった専門性の高い教育である。一方、教養教育は特定の専門分野に限定されない、人文・社会・自然科学全般にわたる幅の広い教育であり、また、文化を学ぶことを通して人格形成を促す教育である。

最近、教養教育の中味も変化している。大学は社会とのかかわりが強いためか、社会からさまざまな注文を受ける。産業界からは、英語を使える人材が求められる。大企業のみならず中小企業も海外との人・物・資金の行き来が増えているのだろう。パソコンやインターネットは、できて当たり前になってしまった。そうした事情から、大学は伝統的な教養に加えて、学生に現代人の教養として、英語やコンピュータの知識・技能の習得を求めようになってきた。

小・中・高の教育は教養教育

大学の教養教育を見ずえる目を小・中学校、および高校普通科の教育に向けると、それらは教養教育と映る。多彩な教科の指導と人格形成への指導からなる教養教育の路線が、小・中・高を貫いて大学の教養教育に接続しているわけである。もし路線がつながっているなら、現代人の教養に対する社会からの要請は、大学にとどまらず、高校・中学校、は

ては小学校にもおよんでいよう。実際に小・中・高校ではすでにコンピュータ教育が行われているし、最近では小学校から英語教育を始めよう、という動きもある。わたしもふだんは大学教員として勤務するだけなので、学校種別を超えた教育内容のつながりに気づきにくかったのかもしれない。

教育目標の一部入れ替わり

こうした連続性があるものの、大学に進学すると、学生はかなりとまどうらしい。その大きな理由は、教育目標がいつのまにか、一部入れ替わるからだろう。

わたしは、授業で学生に説明するにあたり、「おそらく〇〇だと思う」、「〇〇という説が有力だが、まだ決着をみていない」「〇〇ともいえるし、視点を変えると〇〇ともいえる」といったもの言いをする。授業の最後に、1年次学生に感想を書いてもらおうと、「答がひとつではないから難しく、奥が深い」「もっと考える必要があると感じた」とうれしいことを書いてくれる。しかし、読んで頭にくることを書く学生もいる。「けっきょく、今日の授業は何を言いたいのか」「テレビでは〇〇といていた。調べもしないでテキトーな説明をして、恥ずかしくないんですか」という具合。

問題につねに正答があるのだろうか。大学の授業では、正答が定まっていない事項も扱うし、当面の正答にあえて「そうではないと思う」と疑念を向け、学生を探求に向かわせようとする。考え、探求し、発表する活動、それらをまとめて研究活動というが、学生の研究を奨励し促す、という目標が大学教育にはある。1年次学生がそうした新しい目標を理解するには、時間と経験を要するのだろう。

総合的な学習の時間への期待

2005年4月に、文部科学省の教育課程実施状況調査の結果が発表された。これを踏まえ、総合的な学習の時間が設けられたため教科の学習時間が圧縮され、学力の低下をきたした、といった主張もあるようだ。しかし、大学教員としてのわたしは、総合的な学習の活動こそ、大学での研究活動になめらかに接続する、とみる。

大事なことがらの習得は、いろいろな場面で繰り返し体験することにより、着実に進む。現代人の教養も、小学校から大学まで、一貫し連続して育成する必要があると考える。

次期大会開催について

全協研大会とJASCE大会のジョイント開催を予定

- 次期大会は、東京都、練馬区の練馬第三小学校、2006年2月10日を予定しています。
- 今回は各地の実践を多く持ち寄っていただく会になると思います。ぜひ立候補ください。ご連絡は事務局まで。
- また、大会翌日と翌々日には日本協同教育学会（JASCE）の研究大会も同じ会場で開催されています。協同学習のワークショップなど計画されています。土、日にわたる会ですから、こちらも参加のご予定をお立てください。

翻訳書の前宣伝

シュディス・イールソン、スーザン・ハーラム 著

杉江修治・石田裕久・安永 悟・関田一彦 共訳

個に応じた学習集団の編成—イギリスの能力別指導、

習熟度別指導の実践と検証（仮題）

ナカニシヤ出版

教科の学習を促すためのさまざまな努力が日本でも重ねられてきています。近年、文部科学省が、さまざまな機会に強調している習熟度別指導の導入もその努力の一つの側面でしょう。ただ、日本における教育の改善への提言は、そのほとんどが経験と信念に基づいてなされており、実証的研究を重要な根拠としていないという特徴があります。以前なされた、学級規模の縮小に関する議論では、専門家会議の報告でさえ、海外の研究を、政策的な決定に都合のよいように読み取ることでお茶を濁したものでした。

習熟度別指導についても状況は同じです。日本には習熟度別指導の効果に関する、科学的検討に耐える実証研究は皆無に近いのです。実践報告をもって有効性の根拠としている議論にとどまっており、よりすぐれた指導法との比較研究などはなされていません。その効果についての議論では、新しい時代に要請される「生きる力」など、めざすべき学力との関係の本気で扱ったものはなく、習熟度別指導ありきから出発している現状は不思議とも言うべきでしょう。

習熟度別指導は単なる能力別指導ではないと言う人もいます。固定的な能力別クラス編成を行ってすべての教科を指導するなどという方法が問題をもつことは多くが認めるでしょうし、少なくとも今、日本の義務教育課程で行われている習熟度別指導には、そのような乱暴な実践はほとんどないと思います。しかし、実はどのような工夫を加えたとしても、能力の似た者同士を集めて指導するという、能力等質集団の活用は、それだけで子どもの学習条件としては望ましくないことが、グループ・ダイナミックスの研究で明らかとなっています。また、能力等質集団の編成をしようという教師の側の判断には、教師の子どもに対する期待が付随し、教師の期待と一致した結果が出かねないという、ピグマリオン効果がそこに働くでしょう。そのような編成が効果をもたらすとすれば、きわめて限られた場面でのことなのです。

習熟度別指導を含むさまざまな形の能力別グループ編成、クラス編成の効果の比較は、諸外国では、有力な研究者によって数多く、確かな手法を用いて実施されてきています。習熟度別指導の導入にあたっては、それらの研究から学ぶことがまず必要でしょう。数年前まで、教師たちの多くは、子どもを能力等質集団で教えることに懐疑的でした。根拠も示さず習熟度別指導が良いと繰り返す文部科学省や「学者」の意見を繰り返し繰り返し聞く

ことで、判断が変化してきているようです。こういう形での教育文化形成過程は絶対的に問題だと言わなくてはなりません。

能力別指導、習熟度別指導の長い歴史をもつイギリスでも、基本的に能力等質集団での指導は、それがどのような形であれ、問題が多いと考えられてきています。ただ、それでも、そういった手法を用いなくてはならない状況があるようです。日本の教育状況はどのようなのでしょうか。また、イギリスでは長い能力別指導の歴史の過程で、さまざまな指導の工夫もなされてきているはずで、そういう工夫は日本でどれほど紹介されているのでしょうか。さらに、能力別指導のもたらす弊害の幅広さについても、イギリスでは実に多様な視点から多くの検討がなされてきています。日本での短い経験だけから、その短所を考えていいのでしょうか。

本書の訳者 4 人は、協同学習の理論と実践を主要な研究課題としてきています。協同学習研究の背景にある、グループ・ダイナミクス、認知心理学の観点から、習熟度別指導がかかえる問題は深刻であり、表面的に、単なるスタイルとして導入されそうな日本の教育実践現場の状況に大きな危惧の念を抱いてきました。それが本書を訳した主な動機です。

本書は能力別によるグループ編成の問題を広範に、実証的手法を用いて検討したものです。日本で言う習熟度別指導を正しく捉え返すための情報に満ちています。内容は多面にわたっており、注意深く読む必要があります。イギリス人特有の表現の婉曲さから、読者が、持論に都合のよいところだけとって理解すると、間違いを犯す恐れがないわけではないからです。

習熟度別指導については、すでに佐藤学氏の要領を得た紹介がなされています(『習熟度別指導の何が問題か』岩波ブックレット 2004)。しかし、さらに、この問題がもつ広範な課題を、制度面にまでわたって理解するために、本書は有意義であると思います。

刊行は夏休み明けあたりになりそうですが、まずは前宣伝をさせていただきました。

(杉江修治)

事務局からのお願い

新しい年度に入りました。会員の方々には会費納入よろしくお願ひします。

1 年分 2000 円です。

会の財政は、相変わらず、きわめて逼迫しています。

昨年度未納の方は 4000 円の納入をお願いいたします。

郵便振替 □座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

□座名称：全国協同学習研究会

協同学習ワークショップのご案内

日本協同教育学会（JASCE）はこの夏、日本ではじめての本格的な協同学習法トレーニングを始めます。日本の協同学習やバズ学習には優れた実践と理論構築の歴史があります。けれども、それらを広く普及し、後継の人々を育成するための効果的なプログラムはありませんでした。

アメリカでは、1～2日の短いものから5日間の長いものまで、またレベルも入門から指導者養成まで実に様々なワークショップがあります。しかも大学院の授業として単位認定を申請できるほど、内容も整備され、定式化しているのです。

協同学習といっても様々なタイプや技法がありますから、自分の授業に必要なものだけ選んで学びたい、という要望もあるでしょう。また、アメリカのように5日間も研修を受ける時間やお金がない、という意見もあります。そこでJASCEのワークショップは、アメリカのスタイルを参考にしながらも、日本の実情に合わせてデザインされています。その特長を簡単にまとめてみましょう。

1) JASCEのワークショップには初級・中級・上級の3レベルがあります。体験的に基本から学んでいきますが、中級、上級と段階が上がるにつれて理論的背景もしっかり学び、ハウツウを超えた本物の技能が身につくように配慮しました。

2) 各レベルには指定のコア・プログラムと選択プログラムがありますが、コア・プログラムは1日（標準5時間半）で修了します。上のレベルに進級するには履修したプログラム毎のポイントを貯めていくポイント制を採用しました。JASCEとワークショップ/研修プログラム相互承認交流をしている団体の研修に参加してもポイントが貯まり、JASCEの大会で実践報告や研究発表をしてもポイントになりますから、自分のペースで、自分の興味や強みを活かして着実に進級できます。

3) JASCEは協同学習ワークショップの講師ができる力ある実践者養成を念頭に、認定講師制度を設けます。JASCEの認定講師がワークショップを開催する際は、JASCE教材の特別割引など特典が受けられます。

ワークショップに関する問い合わせや受講申し込みは、日本協同教育学会事務局（info@kyoudo-edunet.jp）までお願いします。皆様のご参加をお待ちしています。

事務局からさらにひとつ：e-mailアドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内をe-mailで送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 XXXXXXXXXX、アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

学び合い、高め合いの教育の追求

全国協同学習研究会会報 2005年度 2号

発行日：2005年9月30日

事務局

研究会情報特集

秋には協同学習関係の研究会がたくさん開催されます。関係情報をお伝えします。

I 10月21日 土岐市立土岐津中学校

土岐市教育委員会指定教育課題研究推進校研究発表会

研究主題：学び合いの中で基礎・基本を身につける生徒の育成—「協同学習」を取り入れた授業を通して

13：10 受付

13：40～ 公開授業2時間（全教科）

16：25～ 全体会・講評

問い合わせ：土岐津中学校

II 11月5日 犬山シンポジウム

犬山市教育委員会・犬山市小・中学校長会他 共催

会場：犬山北小学校 体育館

テーマ：今、教育改革で問われているのは何か—自ら学ぶ力を育む教育文化の創造

- 9:05 開始
10:00～ 討論Ⅰ 「自ら学ぶ力」を育む「少人数学級」と「学び合いの授業」
13:30～ 討論Ⅱ 「自ら学ぶ力」を育む教育文化の創造

問い合わせ：犬山市教育委員会 学校教育部 指導課
Tel. 0568-61-1800（内線 1800）

申し込み先 [REDACTED]
[REDACTED] 5
[REDACTED]

なお、犬山市内では10月31日～11月12日の間は市内各校で授業公開があります。
また、前日の11月4日の午後には、市内教師全員参加の「授業改善交流会」を開催します。

Ⅲ 11月8日 犬山市立犬山南小学校

丹波地方教育事務協議会・犬山市教育委員会委嘱 「キャリア教育研究発表会」

研究主題：夢を持ち、仲間と学び合う中で、自分を拓く子—自分づくり、仲間づくりをはぐくむキャリア教育

- 13:15 受付
13:35～ 公開授業
14:35～ 研究発表・指導講評・講演（諸富祥彦 明治大学助教授）

問い合わせ [REDACTED]
[REDACTED]

Ⅳ 11月10日 小松市立今江小学校

石川県教育委員会・小松市教育委員会指定「評価を生かした学力向上推進事業」公開研究発表会

研究主題：「やる気満々、のびのび表現」できる城山っ子をめざして—指導と評価の一体化を図る授業実践の工夫

- 12:40 受付
13:20～ 公開授業

14：20～ 分科会・全体会（講演 杉江修治 中京大学教授）

問い合わせ：

V 11月17日 名張市立百合が丘小学校

名張市教育委員会指定学校教育研究推進校研究発表会

研究主題 自ら学び生き生きと活動できる子どもの育成—集中・緊張・感動のある授業づくりをめざして

8時30分 受付

8時45分～ 公開授業

10時35分～ 全体会・講演会（講演 杉江修治 中京大学教授）

問い合わせ：

VI 11月22日 米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校

研究主題 豊かな心と学力を育み、共に支えあい高め合う生徒の育成

13：30 受付

14：00～ 公開授業

15：00～ 研究発表・講演（杉江修治 中京大学教授）

問い合わせ：

学会にて：日本心理学会での協同学習ワークショップ報告

9月10～12日、慶応大学三田キャンパスで第69回日本心理学会が開催されました。心理学者の協同学習への関心は近年少しずつ高まっていますが、より拍車をかけるべく、全協研に集う研究者仲間ワークショップを開催しました。

当日は約 30 名の若手を中心とした研究者が参加してくれました。ワークショップは大会全体で 100 を超える件数開催されていまして、ますますの参加者数であったと思います。内容は次の通りでした。

テーマ：協同学習の研究・実践動向と心理学の役割

趣旨：協同学習は新しい時代の日本の教育を適切に方向づけることのできる教育の原理である。そこでは協同学習への心理学的研究がどのように関わり得るのか、心理学と教育実践の関係の再考とあわせて議論したい。議論の材料として協同学習の国際的動向を紹介し、日本の研究と実践の実態をまとめ、あわせてその実質的な対応のために設立された JASCE の目標と活動を広く紹介したい。

構成：形態はミニシンポジウムで。時間は 2 時間。

企画・司会・・ 杉江修治

話題提供者とテーマ

協同学習の国際的動向と JASCE 設立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 安永 悟

日本の協同学習の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 高旗浩志

ケーガンの協同学習と日本におけるその受容・・・・・・・・・・・・・・・・ 関田一彦

シャランの Group Investigation から見た日本の総合的学習・・・・ 石田裕久

コメンテータ 蘭 千壽（千葉大学）／上杉賢士（千葉大学）

学力論議への協同学習的コメント

中京大学 杉江 修治

国立教育政策研究所教育課程研究センターが、本年4月22日に公表した「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」によって、学力低下か否かの議論のためのデータがまた増えた。今回の調査結果は、数値で見ると「学力の低下に一定の歯止めがかかったように思われる」こと、「授業後の勉強時間が増し、勉強に対する意識の改善が見られた」こと、しかし、「本質的な思考を問う問題については課題を残している」ということであった。成績の数値上の好成績は、文部科学大臣をはじめとする、ゆとり教育に対する批判を掲げている者たちには、やや不都合なデータかもしれない。

ただ、朝日新聞紙上にあった苅谷剛彦氏ならびに耳塚寛明氏のコメントにあったように、この結果は「学力低下への（教師の）危機感」（苅谷）、「学力不足にやむなく対応した現場教員の努力」（耳塚）が生んだものと解釈することが正しいように思われる。平たくいえば、先生が本気を出して児童生徒にハッパをかければこの程度は成績をあげることができることである。しかし、同じ朝日新聞で、教師の声として紹介があるように「生きる力まで伸ばすには時間が足りない」のであり、教育を取り巻く諸条件の部分的な改善（たとえば少人数授業の導入、30人学級の一部実現、総合的学習の時間の実施など）が、本来目

指した教育成果と結びついているのかどうかを検証する資料がないままである。

今回の調査も含めて、これまでのPISAやIEAの学力国際比較調査は、それぞれの結果の相違が、そのテストのねらいの違いと合わせてしばしば取り上げられるが、一方で一貫した結果も見られている。それは思考が育っていないという点、学習への積極的な態度が育っていないという点である。

日本でこれまで取り組まれてきた教育の改革は、その成果が見えず、一貫して不徹底である。私は、その理由は、改革の掛け声はあっても、どうすれば目指す力が育つかについての議論が極めて不十分であったことにあると思う。改革が「器の改革」であり、「中身の改革」にまで至らない、想像力の欠如を感じるのである。

総合的学習の時間の重要性を説く識者は多い。しかしそれを本当に実効性あるように進めるにはどうするか具体的なイメージを持っての議論なのだろうか。私には多くの議論が結局は理念の議論であり、後は教師がうまくやれと丸投げしているだけに思えてならない。そうすると成果が出ないのは教師のせいだということになる。

必要なのは、どのようにして求める力を育成するのかという方法まで見通した議論である。そして現場での方法の工夫までも可能にする改革である。協同学習という、学習態度の育成も同時に図ることのできる学習指導法に対する感受性を、これまでの議論のどれだけの中に見出すことができるだろうか。

協同学習の立場から見れば、「生きる力」という教育目標それ自体も、個人内にとどまる学力としてしか捉えられていないように思え、幅が狭く感じられる。デューイに理論の大きな源がある協同学習では、公教育の目的としての、民主的な社会の形成者としての、自覚と責任をも同時に学ばせるという観点も明確に含まれている。「教え」が教育だという囚われから抜け出した議論をするために、協同学習の理解は欠かせないものであるように思う。

事務局からのお願い

会員の方々には会費納入よろしく申し上げます。

1年分 2000円です。

会の財政は、相変わらず、きわめて逼迫しています。

昨年度未納の方は4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 □座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

□座名称：全国協同学習研究会

事務局からさらにひとつ：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内をe-mailで送ってもかまわないという会員の方々、空メールで結構ですので事務局宛 XXXXXXXXXX、アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

JASCE（日本協同教育学会）主催のワークショップがあります。すでに犬山市、野田市などで実施され、好評を得ています。学校単位、研究会単位でお申し込みください。

学び合い、高め合いの教育の追求

全国協同学習研究会会報 2005年度 3号

発行日：2006年1月12日

事務局：[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]

全協研第37回大会を開催します

2006年2月10日（金） 於、練馬区立練馬第三小学校

詳しくは別紙大会要項をご覧ください。

『協同』の輪

石田 裕久（事務局・南山大学人文学部）

全国バス学習研究会が、全国協同学習研究会と名称を新たにしてから、3年近くの月日が経とうとしています。当然のことながら、この名称変更についてはさまざまなご意見があったと思いますし、今なおバス学習という呼び名に愛着を覚えておられる方もあるでしょう。

私自身は、どちらかという、内輪のメンバーがその名称についてどのように感じるかということよりも、看板としてメンバー以外の方々にとどのように受け取ってもらえるか、に関心があります。名称に対して敷居が高いと受け取られたり、仲間として関わりにくいと思われるのは困るからです。バス学習という名前は、誤解も含めて、グループを用いなければならない、あるいはそれを用いることを特徴とした学習法である、と理解されることが多かったからです。その意味では、よりオープンな名称になったのではないかと思います。

さて、名称変更をして以降の会を取りまく状況の移り変わりについて、個人的な感想を述べると、オープンな名称を裏付けるさまざまな広がりが出てきたような気がします。たとえば、アメリカを中心として広がりを見せる cooperative learning の実践者・研究者

や「全国個を生かし集団を育てる学習研究協議会」（個集研）の方々との相互交流は、その一例でしょう。こうした交流が実を結んで、昨年の春には日本協同教育学会が設立されました。アメリカにおける協同学習は、幼稚園・小学校から大学までの幅広い授業で、非常に多彩な技法を用いて実践されているところにその特徴があります。また個集研は、バス学習と同様に長い実践研究の歴史をもっているのはご承知の通りです。これが契機となって、cooperative learning や個集研に関わりのある多くの方々、本会にも入会下さるようになっていきます。

こうした「協同の輪」からは次々と新しい試みが生まれていますが、ここでは最新的话题を2つご紹介します。

●ナカニシヤ出版から『教師のためのアイデアブック』が公刊されました。参加度を高め、教室を協同にもとづく学習の場に変えていくためのさまざまなアイデアや技法が満載です。まとまった冊数をご希望の方は、事務局にご相談下さい。

●2006年3月11・12日(土・日)に南山大学で「協同学習法ワークショップ・中級コース」を開催します。協同教育の基礎的な考え方や技法について、一泊二日で実践的に学ぶことができます。定員は30名で、すでに初級ワークショップを修了された方を優先的に受け付けます。詳しくは事務局にお問い合わせいただくか、南山大学教員養成 GP のウェブサイト <http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/gp/> をご覧下さい。

犬山市立東小学校の協同学習について

相澤 陽一（犬山市立東小学校校長）

本校の協同学習について、紹介する。

本校は、犬山市のほぼ中央に位置する、児童数583人の中規模校である。5年前（平成13年度）から、犬山市の教育改革の柱である少人数指導を、協同学習の考え方に基づいて取り組んできた。協同学習の理論や実践方法については、中京大学の杉江修治教授から指導していただいた。

実践に当たり、グループ編成について、校内で下記の3点を確認した。

- (1) 算数に限り、学級を半数にした少人数グループ（10数名）を編成する。
- (2) 少人数グループは、グループ間ではほぼ等質になるよう編成する（習熟度別編成は実施しない）
- (3) グループは固定せずに、児童の実態に応じて柔軟に再編成する。

少人数指導の指導者は、担任と非常勤講師の2名とし、別々の教室に分かれて指導をする。その際に、留意点として、次の3点を確認した。

- (1) 誰もが答えを導くことができるように、皆で助け合う学習を展開する（教科学習と共に、他者への思いやりや社会性を育てる）。
- (2) 教え合うことにより、教える側、教えられる側双方の理解の深まりをめざす。

(3) 考える場として、「一斉」「グループ」「個人」の3つの場面を考える(必ず個人思考の時間をとることにより、学習参加度を上げ、自立心を高める)。

こうした考えで指導を展開し、全校児童への質問紙による調査結果から次のような結果を得た。

○少人数授業が好き	78%
○一斉授業が好き	22%

78%が少人数指導を支持している。概ね期待通りであった。しかし、22%は、少人数指導への課題を提示している。以下の通りである。

- | |
|------------------------|
| ●一斉指導の方がいろいろな意見が出るから良い |
| ●グループだと急かされるから嫌だ |

少人数指導の長所は、学習への参加度が高まる点にある。しかし、一斉指導には、少人数授業にない大きな長所がある。それは、多人数ならではの活気と多様な発言である。また、グループが熟成していない段階では、学習に落ち着けず、一斉指導の方が学びやすいという児童も存在する。

こうしたことから、次のように今後の改善策をまとめた。

- (1) グループ内の意見が全体のものになるよう、教師側の配慮が必要。
- (2) 少人数指導と一斉指導のそれぞれの長所を生かすよう、両者を柔軟に活用していく。
- (3) 児童相互の教え合いには限界もある。状況をよく把握して、教師が適切に支援する必要がある。

すべての子どもが納得する少人数授業を実現するには、教師からの多様な配慮が要求されている。児童から学ぶ姿勢を忘れず、実践を深め、改良していきたい。

日本協同教育学会 (JASCE) のワークショップ

関田 一彦 (日本協同教育学会副会長 創価大学教授)

素晴らしい教育理念を高く掲げて取り組まれる数多くの実践が、夜空を彩る花火のように美しくもはかなく消えていきます。けれど、持続した取り組みがあつてはじめてその真価が顕われるものです。日本には協同教育の視点から見て数多くの優れた教育実践があります。しかしながら、その実践を支える指導方法が十分に伝承されなければ、日本の教育を向上させる力とはなりません。JASCEは協同学習を通して、学び合い高め合う学習づくりを可能にしたいと考えます。そのための基本技能や知識を広く提供し、多くの実践者に共有してもらうことを願って、ワークショッププログラムを開発しています。ここで、協同学習基礎講座(初級・中級・上級の3レベル)の流れとその内容を簡単に紹介しましょう。

まず、協同学習について学び始めた、あるいは学び始めようとする人たち向けの初級レベルです。自ら考え、その考えを仲間と共有する。自らの学びを仲間のために役立てる。

仲間から学ぶことが出来る。このように、協同して学ぶという形態を体験的に理解し、その形態を生み出す基本技能を身につけることを初級ワークショップでは目指します。

受講者は、その後半年から一年、各自の教育現場で実践し、協同の効果や課題を見つめます。JASCEの大会ではラウンドテーブルという時間枠を設けています。そこに参加することによって、日ごろの実践で抱いた疑問や問題を大会の参加者と共有し、情報交換することで解決へのヒントや糸口をつかむことが期待されます。

初級ワークショップを受講し、自らの実践において半年以上の協同学習を試みた後、中級ワークショップに参加することになります。中級レベルでは、協同学習を多少とも実践できる段階を超え、1) 競争と協同の関係を理解し、学習場面の必要に応じて適切に使い分けることができる、2) 協同作業を効果的にすすめるために必要な社会的技能の育成訓練を行なえる、技能が求められます。中級ワークショップではこれらの技能を伸ばすことを目指します。また、JASCE大会などで開催される協同学習の技法ワークショップに参加し、より幅広く協同学習を活用する力を身につけた実践者に成長することが期待されます。

基礎講座の最終段階では、協同学習の技法を軸に、様々な教育場面において協同的な学びをプロデュースする力を伸ばしたいと思います。上級ワークショップでは、協同的な取組や学びに対する多様な評価法を理解し、適切に活用できる際の留意点を学びます。特に、自律的な学習者に育つことを支援する評価を考えます。また、協同学習の発展を歴史的、理論的に理解し、自らの実践・研究を展望できるようになってもらいたいと思います。

中級や上級のワークショップを受け、日々の実践の中で様々な試行錯誤を繰り返しながら、自分なりに協同学習への手応えを感じるようになるには数年かかる場合もあるでしょう。協同学習研究の権威であるジョンソン博士は、一人前の実践家になるには3年はかかるだろう、そして極めるには一生かかるだろう、と述べています。協同学習の基礎を修めた皆さんには、相互の信頼と尊敬を基盤とした学び合い、高め合う教育、すなわち協同教育の沃野開拓に挑戦しつづけていただきたいと思います。

事務局からのお願い

会員の方々には会費納入よろしくお願ひします。

1年分 2000円です。

会の財政は、相変わらず、きわめて逼迫しています。

昨年度未納の方は4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 □座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589
□座名称：全国協同学習研究会

事務局からさらにひとつ：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内をe-mailで送ってもかまわないという会員の方々には、空メ

ールで結構ですので事務局宛 [REDACTED]、アドレスをお教えてください。
経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

学び合い、高め合いの教育の追求

全国協同学習研究会会報 2005年度 4号

発行日：2006年3月28日

事務局 [REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]

全協研第37回大会報告

2006年2月10日（金） 於、練馬区立練馬第三小学校

第37回大会が開かれた練馬第三小学校は、関東各地で算数教育の実践指導をされ、また自ら単元単位で授業実践を行う形での校内研修を図るなど、優れた実践の普及と、授業づくりを軸とした学校経営のモデルを提供されている荒木正志校長の下で、日々授業改善に努力しておられる学校です。

参加者は約100名、あいにく日程的に練馬区内の研究会がいくつも重なり、都内の非会員の方々の参加がやや少なかったことが惜しまれました。

授業は4時間目、1～6年生全学級を対象に公開されました。教科はさまざま、教師の個性に応じた授業づくりを拝見できました。「教育の基盤は、信頼に支えられた人間関係」「学習指導の基本は、学習者の意欲」を基礎に置いた実践は、一人ひとりの教師の意思決定によって作られており、手法の共有より考え方の共有という形で進められているように感じられました。学校体制の研究を進めていくあり方の一つのスタイルを感じました。

昼食、休憩、開会行事を挟んで、95分間の分科会が続いて開かれました。

昨年度は開催校の発表を中心にした分科会でしたが、本年度は全国から20件、小学校7分科会、中学校3分科会、計10分科会を持つことができました。発表者・発表校とテーマについては先に大会のご案内にあった通りです。また、内容については、「協同学習の世界」（全国協同学習研究会HP <http://www.tcp-ip.or.jp/~mrym/home.html>）管理者の丸山さんが順次掲載を進めていただきますのでご覧ください。参加者に比べて分科会の数が多かったため、少人数の会になったところもいくつかあったのですが、充実した実践内容と経験豊かな助言者、参加者のおかげもあり、それぞれ得るもの多く終わることが

できたように思います。

記念講演は、地元の中村橋商店街振興組合理事長川口利夫さんの「結いの文化」でした。「地域で生活するすべての人を大切にする」個人の責任を、地域の実践を踏まえてお話をいただきました。協同学習の考え方の普遍性をさらに確信させる内容であったように思います。

閉会后、懇親会でもさまざまな交流が生まれ、毎年のことながら、協同学習に感受性を寄せ、その実践化にまで踏み込もうという実践者、研究者のすばらしさを改めて感じました。

全国協同学習研究会は常に手弁当の会です。きわめて乏しい大会予算の中で、工夫を重ね、労力をたくさんお使いいただき、そろって実践を公開くださり、盛会に導いてくださった練馬第三小学校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。また、旅費も、遠方の方は宿泊費も自前で、実践発表や助言をしてくださった実践者、研究者の方々にも心から感謝いたします。

全国協同学習研究会会長 杉江 修治

全国協同学習研究会第 38 回大会開催の予告

2006 年度は次の要領での開催を予定しています。ご予定ください。

場所：愛知県犬山市立犬山北小学校

日程：2007 年 2 月 16～17 日

*2 日日程の予定です。16 日は授業、17 日は地域連携を図るフォーラムを計画しています。犬山北小学校はこの領域でも多様で興味深い実践を展開しています。

日本協同教育学会第 2 回大会のようす

2006 年 2 月 11～12 日 於、練馬区立練馬第三小学校

練馬第三小学校を会場に、日本協同教育学会（JASCE）の第 2 回大会「共に拓く協同教育—支え合い高まり合うまなびのために」が、全国協同学習研究会大会に引き続き開催されました。2 日日程で進められましたので、内容的にはゆとりがあり、実践者の方々にはワークショップなど好評だったようです。全国協同学習研究会に引き続き参加いただいた方々も相当数おられ、今回のように大会を連続させることのメリットもあったように思います。

協同教育学会のメルマガを転載させていただきます。

■会長あいさつ

2月11日(土)・12日(日)の二日間、東京都練馬区立練馬第三小学校を会場に、日本協同教育学会の第2回全国大会が開催されました。大会委員長の関田一彦先生(創価大学)の指揮のもと実行委員会の皆さんの献身的なご助力により、盛会のうちに全国大会を無事終えることができましたことをお礼申し上げます。大会当日の冷え込みは厳しいものがありました。これ以上ない快晴に恵まれ、晴れ晴れとした気持ちで大会に臨むことができました。

大会は1日目午前中の研究発表から始まりました。発表は4件で、いずれも質の高い内容であり、参加者同士の活発な討論が展開しました。午後はロングプレゼンテーションやミニシンポジウム、ラウンドテーブルが設けられ、それぞれの会場で協同に基づく教育の理論や実践に関する活発な議論が交わされました。大会2日目は4つのワークショップが開催され、2.5時間から5.5時間の長時間にわたる熱心な活動が展開されました。参加者数は124名と多くの方に参加いただきました。会場での意見交換や大会後にいただいたコメントなどから判断して、多くの方に満足いただけたのではないかと思います。

第2回大会に参加して、確実に学会としてのレベルアップがはかられているという実感をもつことができ、本学会の今後の展開を強く期待できました。今後も会員の皆さん一人ひとりと協力しながら協同教育の理論研究と実践活動を普及させていきたいと思っております。

なお、第3回の全国大会を2006年8月上旬(5日前後)に名古屋の南山大学で開催することが決定しました。準備委員長は石田裕久先生です。皆さまの一人でも多くの参加をお待ちしています。

会長 安永 悟 (久留米大学)

■大会参加者の声

第2回大会参加者からコメントをいただきました。その一部をご紹介します。なお、内容を一部割愛・修正していますことをお許しください。

○**大学教員** 昨日は素敵なワークショップに参加させていただきありがとうございました。LTD話し合い学習法の技法だけではなく、その背後にある協同学習のスピリットを学べたような気がいたします。「協同教育」に対して私がどのように“貢献”できるかはまだ分かりませんが、何かしら心躍るものを感じていることは確かです。

○**大学院生** この度は協同学習学会に参加させていただきありがとうございました。英語の協同学習など参加型のワークショップもあり、大変おもしろかったです。協同学習による授業実践を見学させていただく機会が多いのですが、その多くは単にグループ活動をさせているだけで、生徒の間で責任の押しつけ合いになったり、できる子からできない子に対する一方的な教え込みになったりしているものでした。それだけ協同学習を効果的に行うのは難しく、現場の先生方も模索しながらやっている、とのことでした。その点で、杉江先生のワークショップは協同学習を実践する上での注意点やコツがまとめてあり、非常に分かりやすく現場の先生方も大変納得なさっていました。今後も協同学習のよさを漠然と

説くだけでなく、どういった点でよいのか、どういった点に気をつけなければならないのかを実証的なデータを交えて現場の先生方に示し続けることで、もっと協同学習実践の輪が広がっていきたくらうと思いました。

○**中学校教諭** 日本で協同教育を実践する際の最大の課題は、個人差を認め合う環境づくりかと思われます。今回の杉江先生のお話の中で、「個人差を認め合う方向性をつくるには、子どもにはその意識はあるが、教師の側の心の問題」と言い切られたことに感銘を受けました。まさに、「子どもの幸福」を目指す教育の基本「最大の教育環境は教師自身」であることの証明のように思われました。「教育の中に民主主義を！」とのジョン・デューイの教育思想を実践されていることにも感銘を受けました。また、「単に教えあうということではなく、まず、個人で学ぶことからスタートさせるので、すべきことが明確になる」「自分はこれが一番というものをつくるには、序列でなく努力したことが大事という意識を持たせる」「個人差があるから良い学習ができる、教える側の子が得してる、学ぶことでいっばいの教わる側も得してる、協同学習こそ個性を育てる、人間性を育てる」etc。

人間教育を実践する上において、最も有効な教育法のように思われました。まだまだ言葉は足りませんが、このような機会をもうけて頂きまして、心から感謝しています。

日本協同教育学会第3回開催のニュース

日本協同教育学会は第3回の大会を次の要領で予定しているとのことです。

会場：南山大学（名古屋市昭和区）

日程：2006年8月5～6日

*詳細はまたご連絡いたします。第2回と同様、ワークショップもいくつか開かれますので、実践者の方々には有益だと思います。また、研究的実践をされている方々、研究者の方々はずいぶんこの機会にご発表ください。

協同学習実践資料がホームページから

協同教育ネットワーク (<http://www.kyoudo-edunet.jp/>) が「協同教育実践報告資料集」の掲載を始めました。

次の2件が掲載されています。学校体制での基本的な考え方や具体的な指導案など、情報がたくさん入っています。ご覧ください。

○米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校

『豊かな心と学力を育み、共に支え合い高め合う生徒の育成』

○小松市立今江小学校

『やる気満々、のびのび表現できる城山っ子をめざして—指導と評価の一体化を図る授業実践の工夫』

習熟度別指導の研究書翻訳—前宣伝からいよいよ出版へ

『個に応じた学習集団の編成—イギリスの能力別指導、習熟度別指導の実践と検証』（ジュディス・アイルソン、スーザン・ハラム著 杉江修治・石田裕久・安永悟・関田一彦 共訳 ナカニシヤ出版）が4月中旬に刊行されます。出版社の予定が詰まっていたのか、対応がゆっくりしていたことが遅れていた主な原因なのですが、その分、時間をかけて中身を点検できました。

協同学習は経験を科学的視点で見直すというアプローチを常にとってきた理論だといえます。その視点は習熟度別指導に対しても用いられなくてはならないと思います。訳者としてはたいへん有意義な内容を持つ本であると思います。刊行されましたら、ぜひご覧ください。

すぐに役立つ協同学習入門書の出版！

日本協同教育学会のスタッフによって、が
ジェイコブスらの協同学習入門書の翻訳が
出されました。

協同学習の基本となる考え方、さまざまに
スモールグループを活用する手法、さらに
「よくある質問」（これは監修者らによって
日本の先生方の悩みも付け加えてあります）
など、きわめて実践的な内容となっています。

協同教育学会のワークショップでもテキストとして用いられているものです。全国協同学習研究会、日本協同教育学会、2つの大会の書籍販売でも一番人気の書籍でした。

ナカニシヤ出版が発売元となっていますので、一般の書店でご注文いただければ入手可能です。

定価 2000 円。196 ページ。

事務局からのお願い

会員の方々には会費納入よろしくお願ひします。
1年分 2000円です。
会の財政は、相変わらず、きわめて逼迫しています。
昨年度未納の方は 4000円の納入をお願いいたします。

郵便振替 □座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589
□座名称：全国協同学習研究会

事務局からさらにひとつ：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内を e-mail で送ってもかまわないという会員の方々は、空メールで結構ですので事務局宛 XXXXXXXXXX、アドレスをお教えてください。
経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。